

平成 29 年度
第 3 回
入 学 試 験 問 題

試 験 Ⅱ

10 : 10 ~ 11 : 00

注 意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 解答用紙は2枚あります。それぞれに受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 5 試験終了の合図でやめること。
- 6 問題は各自持ち帰ること。

品川女子学院中等部

平成二十九年 中等部入学試験問題 第三回（試験Ⅱ）

◆答えはすべて解答用紙に書くこと

次の文章は、主として中学生世代の方を対象に、新しい勉強や授業のあり方を提案する内容で、数回シリーズの第1回目（1時限目）にあたるものです。これを読み、あとの問いに答えなさい。

きみが「冒険」に出る理由

みなさんは、映画の『となりのトトロ』を観たことがありますか？

サツキとメイの姉妹が会う、不思議な生きものトトロ。ふたりが引っ越した家に住みついていた、まっくろくろすけ。物語の終盤に大活躍するネコバス。

この不思議な生きものたちは、大人の目には見えません。トトロが空を飛んでも、ネコバスが電線の上を走り抜けても、見えているのはサツキとメイだけ。もしかすると彼女たちも、大人になったら見えなくなるのかもしれない。

いま、みなさんには「大人たちには見えないもの」が見えています。

さすがにトトロやネコバスが見える人はいないでしょう。でも、目を凝らしてください。世界を眺め、大人たちを眺め、自分の心を眺めてください。大切なものが見えてくるはずですよ。

たとえば朝、パジャマを脱いで制服に着替えながら「どうして男子はズボンをはいて、女子はスカートをはくんだらう？」と考える。国語の授業中に「どうして国語の教科書は縦書きで、ほかの教科書は横書きなんだらう？」と考える。あるいは夜、ベッドに入ってからなんとなく「人はなんのために生まれてくるんだらう？」と考える。

身近な疑問から人生そのものを問うような疑問まで、小ささまざまな「なんで？」「どうして？」を考える機会があるでしょう。

じつは、大人になっていくと、こうした疑問を感じにくくなります。

仕事が忙しくて、余計なことを考える時間がない。仕事に直接関係しないような疑問は「余計なこと」として切り捨ててしまう。

さらには、もう何十年も「男子はズボン、女子はスカート」「国語の教科書は縦書き」といった常識に染まって生きてきたせいで、それをおかしいと思うことができない。

たしかな答えを知っているわけでもないのに、疑問を感じることができなくなる。なんとなく「わかったつもり」になっている。まさに、^{注1}「ベークンの言う「思い込み」の罠にはまった状態です。

一方、若いみなさんは、まだ大人の常識に染まりきっていません。

公園で知らない草花を見つけたとき、テレビのニュースでなにかの事件に触れたとき、コンビニで買いものをするとき、道路の交通標識を見たとき。日常生活のなかで、さまざまな違和感を抱くことがあるはずです。「これってなんだ？」と不思議に思ったり、「なんかおかしくない？」と疑問を感じたりすることがあるはずですよ。

この「小さな違和感」を大切にしてください。

^{注2}違和感をスルーせず、自分のなかで大切に育ててください。

なぜなら、その小さな違和感こそが、未来につながる冒険の扉なのです。

ベークンは「知は力なり」と断言しました。

そしてほんとうの「知」は、「疑うこと」からはじまります。

世のなかにあふれる常識、権威、限界、慣習など、さまざまに「あたりまえ」に疑いの目を向けること。大人たちがスルーしている疑問を、自分の頭で考えること。それが「知」の第一歩なのです。

いま、みなさんのまわりには、たくさんウソがあふれています。

100年後や200年後の人たちから「そんな迷信を信じてたの?」「こんなことも知らなかったの?」と大笑いされる

ような常識が、たくさんあるはず。もしかしたら教科書のなかにさえ、ウソが書いてあるかもしれません。少なくとも、100年前の教科書には、いまとなつてはウソとしかいような話がたくさん書かれていました。

そしてみなさんには、ウソを見破るだけの力があります。

ペーコンが指摘した「思い込み」にとらわれず、小さな違和感を察知する、優れた感性をもっています。

変革者たちは、自分のなかに芽生えた「小さな違和感」を掘り下げ、常識を疑い、ウソを見破ることから、冒険をスタートさせてきました。

この1時間目では、「疑うことの意味」と「疑うときのルール」について、過去の変革者たちの事例を交えながら紹介していききたいと思います。

課題解決から「課題発見」の時代へ

もしかするとみなさんは、先生やご両親から「人を疑うのはよくない」と教えられてきたかもしれません。でも、こう考えてください。

友だちや先生、ご両親など、まわりにいる「人」を疑う必要はない。

けれども、その人たちの語る「コト」については、疑いの目を向けたほうがいい。なんでも鵜呑みにせず、自分の頭で考える癖をつけたほうがいい。

いいですか、「人」を疑うのではなく、「コト」を疑うのです。この「人とコト」を切り離して考える習慣をつけておきましょう。

それではなぜ、疑う力が大切なのか。

みなさんのご両親が中高生だったころ、また、おじいちゃんやおばあちゃんが若かったころ、疑う力は、それほど重要視

されていませんでした。むしろ当時は、「なんの疑いももたず、与えられた課題をガンガンこなす人」が求められています。数学の問題集をたくさん解いていくような、「課題解決」の力です。

でも、「なんの疑いももたず、与えられた課題をガンガンこなす人」は、いまやアジアやアフリカにもたくさんいます。しかも彼らなら、日本人よりもずっと安い給料で働いてくれます。

さらに、コンピュータやロボットを使えば、人間よりもずっと速く、たくさん課題をこなしてくれます。コンピュータやロボットには、お給料を払う必要ありません。こうして昔ながらの「課題解決」の仕事は、もはや日本人には回ってこなくなってしまったのです。

それでは現在、みなさんにはどんな力が求められているのか？

答えはひとつ。「課題発見」の力です。

課題発見の意味について、わかりやすい事例を紹介しましょう。

20世紀の初頭に「自動車王」として一時代を築き、世界初の量産型大衆車を製造したアメリカの実業家、ヘンリー・フォードはこんな言葉を残しています。

「もしも人々になにがほしいか尋ねたなら、彼らは『もっと速い馬がほしい』と答えていただろう」

自動車が普及する前の時代、人々の乗り物のもっぱら馬車でした。

遠くに移動したい、もっと速く移動したい、と思ったとき、ほとんどの人々は「もっと速く走れる馬を手に入れよう」と考えました。「馬車」という常識に縛られ、それ以外の乗り物のことなんて、想像することさえできなかったのです。

しかし、フォードの発想は違います。

馬よりも速く、馬よりも疲れを知らない、もっと便利な「なにか」があるはずだ。

そう考えたフォードは、人間は馬車で移動するものだ、という当時の「あたりまえ」を疑い、まったく別の道を探っていました。そうしてたどり着いた答えが、ヨーロッパで発明されたばかりの自動車だったのです。

当時の自動車は、まだまだ数が少なく、一部の貴族やお金持ちにしか買えない「超ぜいたく品」でした。現在でいうなら、だれ 家用ヘリコプターや家用ジェット機のような感覚です。自動車が馬車の代わりになるなんて、誰も想像していませんでした。

フォードは、この「超ぜいたく品」である自動車を、どうすれば安く製造できるか考えました。あたりまえの話ですが、自動車にはエンジンがあります。これは複雑で、つくるのにかなりのお金がかかる装置です。そしてその他の部品も、馬車とは比較にならないほど多くなります。このあたりのお金を削るわけにはいきません。

それではどこを削るのか？ フォードが目をつけたのは、「時間」でした。

ひとつの部品をつくるのに1時間かかっていたところを、5分でつくるようにすればいい。そうすれば1時間で12個の部品ができる。1時間分のお給料で、12倍の仕事をしてくれるようになる。

そこでフォードは、のちに「フォード・システム」と呼ばれる、ベルトコンベアを使った流れ作業による大量生産システムを開発します。よく火災訓練のときにおこなうバケツリレーのように、流れ作業で自動車を組み立てれば大量生産できることに気づいたのです。こうして自動車の価格は大幅に引き下げられ、馬車の代わりとなる家用車が爆発的に普及していったのです。

もしもフォードが「課題解決タイプ」の人間だったら。つまり、「もっと速い馬」を探すような人間だったら。自動車の普及は遅れていたでしょう。それどころか、「流れ作業でたくさんつくる」というシステムそのものの誕生が遅れ、重工業全体の発展にも大きな影響があつたはずですよ。

もともと「発明王」トーマス・エジソンの会社に勤務していたフォードは、与えられた課題を解決するタイプの人間ではありませんでした。みずからあたらしい課題を見つける「課題発見タイプ」の人間だったのです。

さて、そうやって考えると、いまの日本はたっくさんの「馬車」があふれていることに気がつくでしょう。ほんとうは本来的な変化が必要なのに、みんなこれまでの延長線上にある「もっと速い馬」のことしか考えていない。「課題解決」にしか、頭が回っていない。馬車を捨てて、自動車に切り換えるような発想ができない。世のなかにはそうした大人は大勢いますし、

もしかするとみなさんの学校にも、過去の常識にとらわれた先生がいるかもしれません。

みんなが「課題解決」ばかり考えてしまうのは、疑う力が足りないから。世間で常識とされていることを疑い、「課題発見」のできる人になりましょう。

(瀧本哲史『ミライの授業』より)

注1 「ペーコン」……イギリスの哲学者。人間のおちいりやすい偏見や先入観(思い込み)について分析した。

注2 「スルー」……ここでは、見のがすこと。

注3 「抜本的」……根本にさかのぼった姿勢・態度のこと。

